

● 高澤良一 第十一句集 石鏡

● 七月―九月

鷺を見て青田曇りの庄内路
板蕎麦羽黒山門前を待つ間頭上の蠅を追ふ
茶屋の婆勸む民田茄子みんでん抓む
霧の香に八百萬神在す羽黒山
霧の坂羽黒詣での息整え
二の坂で音をね上げ聞けり時鳥
汗たじたじ羽黒権現三の坂
羽黒山足下を蟻も登りをり
参道を少し外れ摘む木苺を
南谷ここがさうかと扇子出す
黒蟻の這ひゐるばかり南谷
幽冥の蝶たゆたへり南谷
涼しとも蒙古撃退成就の鐘
羽黒山大鐘露を生みにけり
羽黒権現姥百合に霧ながれけり
夏雀山居倉庫の瓦に跳ね
甲板酒田港のウッドチェア―に海猫の糞
合欽若木叩ける雨も象潟ぶり
若葉鳥海山して敏達びだつ七年噴火の山
この向きの夏秋田富士よかりけり
ブナ青葉して鳥海山の保水力
プランクトン食うて夏牡蠣太る海
鳥海山の夏場の雨の桁外れ
葱坊主越しなる象潟小学校
蚶満寺裏の青田の目に沁めり
雨しづく露店に夏牡蠣注文す
鳥海山の溶岩らばめく夏牡蠣二口に
夏牡蠣は鳥海山もたらす雨の味
旅人の喉に納まる夏場の牡蠣

首筋にヒリと梅雨入の酸性湯

梅雨蝸湯治話が長くなり

半夏生朝が来てゐる自炊棟

くさぐさの病ひ秘し入る青葉の湯

煮炊きの火こもごも半夏の湯治棟

漫画本手にし半夏の湯治人

硫氣に顔撫でられ夏曉の露天風呂

夏曉の湯浴びに湯治の床もぬけ

同音にヘエと女ら銀龍草

呼ぶこゑに後戻りして銀龍草

雨の水輪出で入りつして細藺

銀龍草女五人に囲まるる

木道よりもうせん苔に目を落とす

ワタスゲの雨吸ひ過ぎて絮の悄気

天候は出たとこ勝負夏山行

後生掛温泉

後生掛の湯治棟見ゆ虎杖越し

後生掛の燕挙げをり地獄谷

一驟雨青森椴松濡らし去る

生保内節短夜の湯に響かせて

自炊棟その間を飛ぶ岩燕

掲示して句会の予告湯治棟

湯治棟浴衣など吊り仕切りけり

浴衣干す針金ハンガー湯治棟

かがんぼの閉じこめられし湯治棟

雑魚寝すや団扇片手に湯治人

六月の自炊棟廊冥く長し

蚊の姥に消灯時間湯治棟

うしみつのががんぼ離る脱衣籠

郭公にぼちぼち起き出す湯治人

自炊棟短夜明けて煮炊きの火

郭公に湯疲れの身を漂よはせ

湯治人ボソボソ話しゐる夏夜
ぐつぐつと煮ゆる泥湯や雲の峯
湯けむりの翳這ひゆけり青すすき
雪溪八幡沼の風に椴松頭を削がれ
雪溪の風にウインドブレーカー鳴る
雪溪の風を受けつつスケッチす
雪溪の半ば風向き変りしか
雪溪の風がたらさうヒナザクラ
話声ぴたりと止まり岩鏡
青嶺攀ずよろよろ岩手県北バス
旅人に盛岡駅の作り滝
海猫の糞透明に夏至明けにけり
水揚げ場鯖鯖の太海港
さざゑ漁仁右衛門島の岩隠り
ふなばたに箱眼鏡のみ新しや
水みず見き漁り木地新しき箱眼鏡
船名入りリヤカーしこたま鯖積んで
古書即賣案内元は紙魚之會
冷奴堅牢箸をつけむとす
蕃茹に塩たっぷり昭和生まれなる
もめごとや野毛坂下の夏の闇
傍らにビールの空き缶かはたれどき
老人の間食モンキーバナナかな
棕櫚の花一寸バナナを思ひ出し
すべりひゆ繁茂なにぶん古き庭
捕虫網出会ひ頭の蝶逃がす
メリハリつく家居風鈴吊りてより
独酌の胸乳へ送る団扇風
鳴神の幕引とんと目途たたぬ
夕立の音立てゝ街呑み込めり
朝顔のくたんと十時廻る日に

町雀けふは夕立まぬがれて
遣り過ごす韋駄天驟雨バーガー店
籠枕年金暮らし快適ぞ
浪々の身をいまさらに昼寝覚
林火忌を憶へばそれに連なるひと
林火忌の朝動き出す街の音
白昼の真中に覚めて白縮
あらためて大暑と聞きて太吐息
空蝉は白雨飛沫を浴びてをり
空蝉をおっかなびっくり抓む指
油虫触り犯せるものの数
油虫下見の現場灯さるる
パソコンの画面を舐めに油虫
音曲に合はせて咲くや烏瓜
烏瓜窺ひ咲ける夜の怪し
熱帯夜はと覚め夢のもうこりごり
太幹にしてなかなかの百日紅
青芝がぐんぐんボール落下点
鰻をり光湛えて桶の底
鰻描く腹を真白にたらし込み
漁減りて海星ばかりが殖ゆる海
真夏夜をチャンバラ好きの映画好き
煮浸しの鰻を返す八月尽
船蟲に持ち場持ち場のあるごとし
切返すごとくに白雨上りけり
徒浪の盆供曳きては打寄せぬ
夏草に雨横なぐり五能線
藺枕に首転がしているうちに
かさぶたを搔きこはす癖八月尽
鮑金一丁持って海底へ
犯人を妻見破れり夜の秋

また夕立こどもだましのやうな空
ラバウルに灼けし零戦見て船旅
朝顔に水やる朝の内がよし
よその子とすぐうちとけて水遊び
曉鯛教ふるこゑに重なりて
白雨の仕上げに風を送りくる
急雨来る韻き裸にはおるもの
紹興酒晩夏の酔ひのよるべなく
茅ヶ崎 地魚料理店 えぼし
品書は天候次第夏魚
妻湯浴む間のげそ煮の火を守れり
とんカツのツマのパセリのやうな日々
ひしひしと水の暮れ来て鵜に鵜影
走り根を洗ひて夏の雨あがる
鰻屋の主好みの歌麿絵
蒲焼に呪文のごとく山椒かけ
昼寝覚五臓の位置が不確かで
煮立てゐる味噌汁の香が朝顔へ
あめんぼうちよっかい出され遣り返す
困の蜘蛛にさうさう獲物なかりけり
八幡船ばんせんさながら夕焼け雲南下
雄日芝に雨透きとほり透きとほり
顔叩き力士勝気を呼び込めり
首捻り宙を睨んで負け力士
インタビュウはあはあぜいぜい勝力士
過ぐるこゑへくそかづらと言ひ捨てに
銀杏の生る木生らぬ木思召し
つんつんとへなりと野辺の秋草は
地区図書館朝涼の顔集はしめ
図書館の中庭に秋待てる樹々
秋色のこれより亘る街並木
朝顔の残りの花期を尽してや

穴惑前にしどぎまぎしてゐる妻
来客にすててこの腰泳がせて
萱初穂泥亀新田たりし地に
峰雲の力づくにて作りし塔
腹に据えかね居るところをはたた神
芙蓉の明るさ例ふるものの見つかからず
午から晴れ芙蓉の気色とりなおす
好例と引き合ひに出し集るたか蟻
昨きそよりけふ氣力の優る紅芙蓉
かまつかに殴りかからむばかりの雨
苦瓜の渋面雨に叩かれて
隼人瓜当世風を通しけり
小用を足しに葎の真ただ中
長たらしき呼び名の花火揚がりけり
あめんぼの鰐迫合の何時果てる
芙蓉咲きこつちを向ひて呉れぬ花
聞き分けて違ふ虫の音三つほど
新涼やあらかた骨の膝小僧
芙蓉咲きけふもぼんやり日を過ごす
茶の間にも寄せて颱風余波の浪
颱風禍まざまざチャンネル切り替えても
寐落つまで耳を遊ばせゐる良夜
さきに寐し秋夜の妻の後向き
石火矢のここに炸裂まんじゅさげ
天下の險もみづるにせよせぬにせよ
ぶらさがり止まりが好きで秋の蝶
芙蓉散り法器のやうなその落花
秋草の風に打合ひ古ぶ穂よ
はるばると秋刀魚は南下この刻も
竜淵に潜む色愛で紹興酒
万願寺とうがらしとや火恋し

賀茂なすの素の味秋はもうそこまで
糊の効きわるき秋暑の古切手
その殻も薄手に秋のかたつむり
曇日のひかり押さえてねこじやらし
屁理屈の一つもなくて水澄める
秋草や舗道余熱を持ち続け
蜘蛛の困の獲物にこれといふもの無く
秋の蚊を打ちて血しぶき浴ぶはだえ膚
履物に妻の温みや後の月
養生は一生のこと水引草
コンビニの老人向けに売る秋果
秋風が見えるが如く眼鏡拭き
二人して食ふには大き梨折半
梨を剥きその一片に楊子立て
梨なんぞ剥いて無聊の手を濡らす
刺客史記篇読む地虫鳴く夜の底
花サルビヤ旺んに空気澄みゐたり
とりとめなく秋の日注ぐ草っ原
湯立神楽日に日に秋の日は透きて
秋麗の宮司は佐野家湯立舞
まんじゆさげ薙ぎて悪餓鬼健在ぞ
ゐのこづち払へるこゑの大わらは
沓履きて古刹の秋のあめんばう
そこ動かぬ蜻蛉にたうたう根負けして
墓域より人家へ飛んで曼珠沙華
秋暑のこと家鴨に言ってもはじまらぬ
めつきり秋らしくなる日をピザ焼いて
相撲見て膝を叩いて晩酌や
負相撲鬚が全てを物語る
満腹の腹先すっかり虫の闇
草虱はたき合ひゐる音のする

浄見寺 大岡越前守墓所
忠相の生れ在所や諸島

風小僧落としてゆきぬ山の栗

毬栗の淡彩愛づる草の上

落栗の路考茶いろ帯び幾日経し

秋の蠅吉田牧場たか 集る牧牛見せ呉れし

秋天にかざし獣医の注射針

日に爆ぜるものの音して牧の秋

牧牛の尾を振る他は秋の風

蜻蛉の咄嗟に我を交はしゆく

風が風追ひ越しゆけり狗尾草

しじみ蝶降り立つほどに道露けし

菊芋の長けて切なきまで青空

タブー視人体の不思議展 東京国際フォーラムの垣の払はれ人體展

正視して絶景秋の人體展

*組織や器官を出来るだけ生きている状態に保存する技法
うそ寒し。プラスチックでふ手法

そぞろ寒自律神経系標本

人體展もみづるものに骨格筋

尿管は腎臓を出て水の秋

標本倣蛇笏(誰彼もあらず)天自尊の秋 飯田蛇笏としての脳倣天自尊の秋

佛性倣漱石(仏性は白き桔梗にこそあらめ 夏目漱石)はここにうそ寒神経網

鼻倣なくそに通る秋風人體展出でて

金尿倣なくその如き零余子を掌に下山

蜻蛉に無き石段が吾にあり

北鎌倉始めての路藪めうが

綿虫に道を訊きゆく多聞院

言うならば葛這屋敷荒れ放題

土盛りせしそこが山頂草の花

洋梨の油絵掲げ洋菓子店

秋空になすりつけたるやうな雲

またたびに降りだしさうな出羽の空

山ぶだう酒持病直せと賜はりぬ

秋雨と云ひ陋巷に満つるもの
白式部孔子基督釈迦の智慧
銭湯の煙突月と睦むかな
大露に衿搔き合はせ驚きぬ
触るもの全てに露の夥し
あんこ腹あづけて力士がぶり勝
その巨漢恃める力士ポカ多し
地卵の色の満月上りけり
武州金澤明けて朝月松の上
美味けりや佳し諸の器量を云ふ勿れ
靴の紐結び直せり十賊の辺
五輪塔報国寺片寄せられて竹の春
寺の名が即ち地名地虫鳴く
落鱸はらふぐと漁東京湾のとは口に
氷ごと背せ黒鰯ぐろを揚げて漁仕舞ひ
鱸跳ねあま天羽あま漁協のト口箱に
秋燕の翼返すや伊豆相模
椋鳥と少し汚れた鳥を指し